

【11】 人々の衣服を染めた阿波の藍

阿波藍は、どのように生産・販売されてきたのだろうか、また、そこに隠された藍作農家・商人の知恵や工夫とはどのようなものだったのか、説明しよう。



江戸時代初期に描かれた吉野川(正保図)



田中家住宅主屋(石井町)



田中家住宅配置図



葉藍の様子(5月頃)



藍納屋の軒先につるされた和舟

「四国三郎」吉野川と藍づくり - デメリットをメリットに -

吉野川は、「四国三郎」と呼ばれ、日本の三大暴れ川として知られる河川です。江戸時代、吉野川には堤防がなかったため、台風の際に大洪水が起きていました。洪水は、住民の生活に大きな被害を与える一方、収穫後の藍畑に上流の肥沃な土を流入させるというよい点もありました。また、藍は台風の前に刈り取りが終わってしまうため、阿波に適した作物でした。

藍屋敷「田中家住宅」- 洪水との戦いから生まれた先人の工夫 -

徳島の藍作りを今に伝える建物として石井町の重要文化財「田中家住宅」(国指定)があります。田中家は、今からおよそ390年前に、徳島藩の招きにより播磨(今の兵庫県西部)から藍作を指導するために、石井町藍畑に移り住みました。田中家は農地の開発と藍作を進めましたが、屋敷や田畑が毎年のように洪水で被害を受けるため、江戸時代末に敷地の造成をはじめ、約30年をかけて現在の建物をすべて完成させたといわれています。

吉野川の洪水に備えて高い石垣を築き、その上には表門・広場・主屋が建ち、藍納屋・藍寝床など、藍作に使用される建物が建ち並びます。

このような屋敷の様は、さながら城郭を思わせる造りとなり、阿波の大規模な藍商農家の特徴で、「藍屋敷」と呼ばれています。

新町川沿いの藍倉 - 今はなき、懐かしき景観 -

藍作りが盛んに行われた頃には、製品としての藍(「藍玉」)の多



田中家北藍寝床脇の石垣



美馬市脇町南町
(国選定重要伝統的建造物群保存地区)



奥村家住宅
(国選定有形文化財(藍住町))



阿波藍製造法
(国選定保存技術)

くは新町川沿いの藍倉あいくらに集められ、船で全国に送られました。現在、運輸の主流は陸運ですが、当時は水運が主流でした。かつては、新町川の両岸に藍倉が軒を連ね、川面に映る白壁と青石は、徳島の繁栄を物語る景観でした。

藍作の衰退のあともなお - 今も残る藍作の面影 -

明治に入り、安価なインド藍やドイツからの化学染料(人造藍)の輸入が始まると、藍は商品作物として役割を次第に終えていきました。

藍作の衰退のなかで、吉野川中下流域の藍作地帯では他の作物への転換が進み、京阪神への農作物の供給地として重要な役割を果たすこととなります。

吉野川流域では、今も藍作の繁栄の象徴である「藍屋敷」が残っています。「田中家住宅」のほか、「奥村家住宅」は、阿波藍に関する展示・体験施設、藍住町立歴史館「藍の館」として活用が図られています。また、「美馬市脇町南町」は、かつて吉野川中流域での阿波藍の集積地として栄えた商家町で、現在では年間約20万人が訪れる徳島を代表する観光地となっています。

阿波藍は途絶えることなく作り続けられ、数こそ少なくなりましたが約675俵(平成24年度実績)が徳島県内で製造され全国に送られています。阿波藍の優れた製造技術を保存するため、1978(昭和53)年に国は阿波藍製造を「選定保存技術」に選定しました。この技術は、今も「阿波藍製造技術保存会」によって受け継がれています。



新町川の藍倉(昭和初期)
(徳島県立文書館提供)

「重要伝統的建造物群保存地区」とは、市町村が決定した伝統的建造物群保存地区のうち、特に価値が高いものとして国が選定したもので、「選定保存技術」というのは、文化財保存のために欠くことのできない伝統的な技術や技能で、保存措置を講ずる必要があるものことです。

